キズナエピソード

袖城 セイラ　1話

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

そんな時、俺はセイラに話しかけられた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［セイラ］

「オムニス、大丈夫だった!?」

［オムニス］

「いや、ちょっと危なかった。

巻き込まれて死ぬかと思った……」

［セイラ］

「それなら、これからは

戦闘中はどこか安全な場所で

じっとしていたら……？」

［オムニス］

「いや。やめておく。

ただ見てるだけってのもツライからな。

少しの時間でも永遠に感じちまう」

［セイラ］

「ふふ。そうね。

じっと何かを待つときって、

いつもより長く感じるものよね」

［オムニス］

「……！」

［セイラ］

「……オムニス？　どうかしたの？」

［オムニス］

「……いや、なんでもない。

ほら、さっさと行くぞ」

//ADV形式終了

//暗転

//場面転換：白い部屋

//ヴィジュアルノベル形式開始

白い部屋に戻って来た俺は、感慨深くため息を吐いた。

「じっと何かを待つときって、

いつもより長く感じるものよね」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが思い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、墓地近くのバス停……。

その時の俺は、バスが来るまでの時間を潰していた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//墓地近くのバス停

［とびお］

親に頼まれた用事を片付けて、

帰ろうとしたまでは良かったのだが、

乗る予定のバスがなかなか来ない。

［とびお］

充電を忘れてスマホの電池も切れてしまい、

やることがなくて暇を持て余す。

そもそも、どれくらいでバスが来るのかも確認できない。

［とびお］

何度目かのため息をついたとき、

道の向こうから一人の女性が俺の隣にやって来た。

……それが、セイラだった。

=========================スチルカットシーンA開始=========================

［とびお］

「……」

［セイラ］

「……」

［とびお］

遠くから見えていた時はわからなかったが、

近くで見ると凄く綺麗な人だ。

俺は思わず目を奪われてしまう。

［とびお］

その、少し悲しそうな顔と雰囲気に惹かれ、

どうしてだか、声をかけずにはいられなかった。

［とびお］

「あのー。実はスマホの電池切れちゃってさ、

時間全然わかんないんだよね。

今何時か、教えてもらってもいい？」

［セイラ］

「……11時26分です」

［とびお］

「ってことは……うぐっ。あと15分もあるのか。

カップラーメンが5回は作れるぞ？

……そう考えると、かなり長く感じない？」

=========================スチルカットシーンA終了=========================

［セイラ］

「……」

［セイラ］

「ふふ、そうですね。

じっと何かを待つときって……

いつもより長く感じるものですよね」

［とびお］

「ホントにそれ！　この前もタミヤから――

あ、タミヤってのは、俺の学校の生徒指導の先生ね。」

［とびお］

「そいつから説教食らったとき、

たった10分がめちゃくちゃ長く感じて……」

［セイラ］

「生徒指導のタミヤ先生……？

もしかして、丸いメガネをかけている……？」

［とびお］

「そうそう！　って知ってるの？

もしかして、有羽の生徒だったり？」

［セイラ］

「はい、そうです。都立有羽3年の袖城セイラです」

［とびお］

「3年生！　俺の先輩じゃないですか！

なんか、タメ口ですいません」

［セイラ］

「あ……ううん、普通で平気。

あなたが話しやすいように話して」

［とびお］

「じゃあ、お言葉に甘えて。

実は俺、敬語とか苦手なんで、助かります」

［とびお］

そうしてバスが来るまでの間、

俺はセイラと世間話に花を咲かせた。

しばらくして、ふと彼女が遠くを見やる。

［セイラ］

「ここ、向こうの墓地の入口が見えるのね」

［とびお］

「まぁそうだけど、どうかした？」

［セイラ］

「……私があそこから出てきた時、

……もしかして、見えてた？」

［とびお］

「えぇっと……まぁ。」

［とびお］

実際、遠くから見ても

明らかに泣きはらした後だとわかる様子で

セイラが墓地を出てくるのを、俺は見ていた。

［セイラ］

「そう……」

［とびお］

「うん……」

［セイラ］

「……」

［とびお］

「……」

［とびお］

しまった……めちゃくちゃ気まずい。

折角楽しく話せていたのに……。

やはり気づかなかったフリをするべきだったのだろうか

［セイラ］

「……何も、聞かないのね」

［とびお］

「いやぁ、そのあたりはプライベートすぎるかなって。

あと、そういうの話すのって、辛かったりするでしょ？」

［とびお］

俺の返答はセイラを驚かせたようだった。

彼女は目を丸くして、しかしすぐに優しく微笑んでくる。

［セイラ］

「そう言えば、あなたの名前……まだ聞いてないわ」

［とびお］

「あー、ごめん。言い忘れてた。

2年の量とびお。よろしく、先輩」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

俺がノリで手を差し出すと、セイラは一瞬戸惑った後に

「よろしくね」と

手を握り返してきてくれた。

触れ合った場所から彼女の熱が伝わってくるようで、

俺の胸は大きく高鳴りだす。

礼儀正しく、容姿も美しいその先輩に、俺は惹かれていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END